

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

論文以外のコンテンツ

雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	9
発行年	2015-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007486/

Eco-Philosophy

Vol.9



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

東洋大学『「エコ・フィロソフィ」研究』第9号

contents

はじめに 山田利明	1
TIEPh 活動組織	3
2014 年度活動内容一覧	5
総論	9
「エコ・フィロソフィとは何か」 河本英夫	11
「エコロジー教育における哲学の役割 ー「エコ・フィロソフィ入門」の取り組みー」 岩崎大	25
I TIEPh 第1ユニット 自然観探究ユニット	35
「初期日本哲学における「自然」の問題」 相楽勉	37
「田中神社の手水鉢：南方熊楠の未成熟な言語」 田村義也	51
「南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察」 唐澤太輔	61
「入れ替わる「親」と「子」、そして「語り手」 ——中上健次『地の果て至上の時』論」 早川芳枝	75
「『金光明経』にみられる自然観」 西村玲	89
「唐代の宮廷に響く異国の旋律—四方楽—」 王媛	97
「玉利喜造の靈気説からみる自然と身体」 野村英登	109
「郭沫若『女神』における自然—生命主義と汎神論—」 横打理奈	119

II TIEPh 第2ユニット 価値観・行動ユニット137

「サステナビリティと主観的 well-being の関連について

ーweb 調査による分析結果ー」 堀毛一也・大島尚139

「環境問題とコミュニティ意識

ー社会関係資本からの検討ー」 大島尚・堀毛一也151

「自己肯定化と感染症の身近さの認知が遺伝子組み換え食物への態度に与える影響」

大久保暢俊・下田俊介・東垣絵里香・佐藤重隆167

III TIEPh 第3ユニット 環境デザインユニット175

「イーストコースト・エクスプレス」 河本英夫177

「ファンタスティックロード——熊野」 河本英夫193

「大地の熱——八丈島」 河本英夫207

「レジリエンス再考—心的システムの安定モデルを構想する」 稲垣諭219

「現象学と自然科学の相補関係に関する一考察（1）」 武藤伸司235

「暗黙知及びハビトゥスとの関連における習慣と身体の考察」 増田隼人249

はじめに

TIEPh 代表 山田 利明

エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ（TIEPh）が置かれて、今年は9年目になる。「10年ひと昔」というから、設立時の話は昔話の類に属することになる。初めは東京大学を中心とする文部科学省科学技術振興調整金による「サステナビリティ学」の立ち上げに参加し、その終了によって東洋大学独自の「エコ・フィロソフィ教育の確立」を目的とした私立大学研究基盤形成事業によって、TIEPhの運営と活動は継続されてきた。それはまさしく四年前のあの東日本大震災の時に遡る。通常なら、四月の上旬には文科省から採否の通知があるのだが、その年は行政も大きく混乱して結局7月頃ようやく採択の通知があった。初動の遅延は各ユニットに影響をあたえたが、とにかく紆余曲折あって今日に及ぶ。

ただ、当初の計画を超えて、想像もしなかった大震災と津波からの復興が組み込まれ、以後毎年それに関わる研究活動が加えられているのは、TIEPhの社会貢献の最も重視すべきところであろう。いまや、震災復興と環境問題は切っても切れない関係にある。特に原発問題に関わって、今後のエネルギー維持の方途を図る議論は、明らかに政治問題となってきた。

これについて、先日、TIEPh主催のシンポジウム「ドイツの文化とエコロジー」で、G. シュテンガー教授の提言をどのように考えるべきか、われわれは、覚悟しなければならないときに来たように思う。確かに福島原発の出来事を、「事故」として一般化すれば、例えば飛行機事故によって多数の人命が奪われながらも、そのたびに安全性を高め性能を向上させた結果、現在ではかなり安全性の高い乗り物となっている事実を考えてみる必要がある。もちろん飛行機事故と原発事故では被害者の数、被害地域の広さは比ぶべくもないが、今回の事故が電源の喪失という、原子炉本体とは全く関係のないところに起因した事故であったことを想起する必要がある。つまり電源の流失さえなければ、あるいは流失してももう一段階の電源確保のシステムがあれば、今回の事故は起こらなかった。このことを冷静に判断する必要がある。その結果、人の住めなくなった地域が現出し、数万の人が父祖の地を離れなければならなかったことも事実である。

教訓とすればあまりにも大きな代償を払いすぎた。これをどう生かすのか。世界は注目している。

TIEPh 活動組織

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表（センター長） 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tsutomu SAGARA	Professor, Nature Unit	相楽 勉 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Associate Professor, Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Ryosuke YAMAMOTO	Associate Professor, Nature Unit	山本 亮介 自然観探究ユニット
Asako NOBUOKA	Associate Professor, Nature Unit	信岡 朝子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Kazuyu HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也 価値観・行動ユニット
Kazunari YAMADA	Professor, Values and Behavior Unit	山田 一成 価値観・行動ユニット
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 客員研究員
Yoshiya TAMURA	Research Fellow	田村 義也 客員研究員
Taisuke KARASAWA	Research Fellow	唐澤 太輔 客員研究員

Yoshie HAYAKAWA	Research Fellow	早川 芳枝 客員研究員
WANG Yuan	Research Fellow	王 媛 客員研究員
Satoshi INAGAKI	Research Fellow	稲垣 諭 客員研究員
Shinji MUTO	Research Fellow	武藤 伸司 客員研究員
Dai IWASAKI	Research Associate	岩崎 大 研究助手
Hideto NOMURA	Research Supporter	野村 英登 研究支援者
Hayato MASUDA	Project Research Assistant (PRA)	増田 隼人 リサーチアシスタント
Kurumi Takenaka	Project Research Assistant (PRA)	竹中 久留美 リサーチアシスタント

2013 年度活動内容一覧

※TIEPh 研究員は下線表記

4 月

- ・ニュースレターNo.18 発行

5 月

- ・24 日

TIEPh 共催 研究会（環境デザインユニット）

「ARAKAWA+GINS という経験ー22 世紀身体論を目指してー」

発表者：稲垣諭、三村尚彦、染谷昌義

場所：三鷹天命反転住宅

7 月

- ・30 日

TIEPh 主催 研究会（自然観探究ユニット）

発表者：相楽勉、早川芳枝、野村英登

司会：河本英夫

場所：東洋大学白山キャンパス 6 号館第 3 会議室

8 月

- ・ニュースレターNo.19 発行

- ・4～7 日

八丈島地熱発電所および自然環境視察（自然観探究ユニット、環境デザインユニット）

- ・20～25 日

荒川修作関連施設およびニューヨーク・ボストン環境デザイン関連施設視察（環境デザインユニット）

9 月

- ・19～21 日

南方熊楠顕彰館および熊野古道視察（自然観探究ユニット、環境デザインユニット）

11 月

- ・15 日

TIEPh 共催 ワークショップ（自然観探究ユニット）

『自然といのちの尊さについて考える』刊行にむけて」
発 表 者：中川光弘、立入郁、秋山知宏、関陽子、上柿崇英、増田敬祐、岩崎大
場 所：東洋大学白山キャンパス 6 号館文学部会議室

1 2 月

- ・ ニュースレターNo.20 発行
- ・ 1 5 日
TIEPh 主催 研究会（環境デザインユニット）
「第六回人間再生研究会」
基調講演：野崎大地
講 演：河本英夫、池田由美
症例研究発表：三田久載、月成亮輔
討論会司会：稲垣諭
場 所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 6B15 教室

1 月

- ・ 1 7 日
TIEPh 主催 研究会（環境デザインユニット）
「天命反転トーク」
発 表 者：田中泯、本間桃世、河本英夫
場 所：三鷹天命反転住宅

2 月

- ・ 1 6 日
TIEPh 主催 即興ダンス・ワークショップ（環境デザインユニット）
「身体の内発性」
講 師：岩下徹
対 談：河本英夫
場 所：東洋大学白山キャンパス井上円了記念ホール

3 月

- ・「エコ・フィロソフィ」研究第 9 号、別冊第 9 号発行
- ・『自然といのちの尊さについて考えるーエコ・フィロソフィとサステナビリティ学の展開』
茨城大学 ICAS 共同刊行
- ・ DVD 作品『イノセント・メモリーー身体記憶の彼方へー』発行
脚本・プロデュース：河本英夫
- ・ 1 0 日
TIEPh 主催 国際シンポジウム（環境デザインユニット）
「ドイツ文化とエコロジー」

講 演：ゲオルグ・シュテンガー、山口一郎、河本英夫
場 所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 6404 教室

• 12～13日

福島県被災地環境視察（環境デザインユニット）

• 17日

TIEPh 主催 シンポジウム（自然観探究ユニット）

「大地の思想－風水・聖地・里山－」

発 表 者：大形徹、宮本久義、田村義也、河本英夫

場 所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 6209 教室

• 24日

活動報告会（評価委員会）

I –TIEPh 第1ユニット 自然観探求ユニット–

このユニットでは、自然観や宗教の多様性を吟味しつつ、東洋思想のもつ現代的意義を提示する活動が遂行されている。

我々は、文献研究を通して、仏教思想や中国思想にみられる東洋の伝統的な自然観の研究を探究してきたが、引き続きその成果を蓄積しながらも、現代社会との架橋となる近代の日本社会における自然観の研究に取り組んでいる。日本近代において、東洋の伝統的な自然観と、西洋の近代的な自然観とは、どのような出会いをし、どのように変容してきたのか。単純な二項対立では済まない重層的な影響関係を明治大正期の文化には見出すことができる。東洋的な問題が西洋的な制度として構築された近代日本において、哲学思想に止まらず文学から民俗学までに射程を広げて論じること、古典と現代をつなぐエコ・フィロソフィの可能性を探究している。例えば熊野をフィールドとして、南方熊楠の思想から、中上健次の文学から、その自然観を考察する取り組みなどがそうである。

さらに、現代日本のエコ・フィロソフィの確立を追究する試みとして、「自然と私たちの尊さを考える」をテーマに、この数年間人文科学と社会科学分野での学際的な共同研究を進めてきた。この成果は近く書籍として刊行する予定である。

Ⅱ —TIEPh 第 2 ユニット 価値観・行動ユニット—

人間の行動が環境の変化を引き起こし、その変化が人間自身の生存を脅かしているというのが現在の環境問題の一側面である。地球規模で生じている環境の悪化は人間の行動に起因しており、行動の背後にはそれを制御する心理過程が存在し、一方で環境問題を認識する心理過程も存在していることから、この問題の解決のためには心理学的な立場からの検討が重要であると考えられる。しかし、これまで心理学で環境の問題を取り上げる際には、周囲の環境が人間の行動にどのような影響を及ぼすかといった枠組みが中心で、自然環境のような大規模な環境の側面や、行動が環境に影響を与えるというような問題が取り上げられることは少なかった。したがって、「エコ・フィロソフィ」の構築と展開を目指す本研究イニシアティブにおいては、従来の心理学の研究手法や成果を踏まえつつも、新たな視点を導入した研究分野の確立が必要となっている。

そこで、われわれの研究ユニットでは、まず環境に対する人間の価値観の側面からこの問題を検討することにした。心理学的な立場から環境問題にかかわる行動を検討するには、その行動の背後にある個人の態度を明らかにする必要がある。態度は、個人ごとに比較的安定した傾向であるが、社会的な環境により変化する可能性を持っていることから、人々が環境問題の改善に向けた態度を形成し、行動するようになることが問題解決の手がかりになると考えられる。しかし、態度変化をもたらす要因は単純ではなく、個人ごとの価値観に依存する面が大きい。価値観は、個人の経験だけでなく、文化や民族、国家、宗教、世代、性別などによっても規定され、一般に多様性を前提として議論されることが多い。おそらく、環境に対する価値観も多様であり、むしろさまざまな価値観の存在自体が現代の環境問題を引き起こしてきたという側面もあると思われる。そこで、まずは多様な価値観の内容を理解することから始める必要がある。

そして、環境配慮行動を導く要因を追究するために、社会的な利害構造に着目した社会的ジレンマの研究、コミュニティにおける規範や信頼の問題を扱う社会関係資本の研究、さらには幸福感や *well-being* との関係に注目するポジティブ心理学の立場からの研究などを行っている。

Ⅲ —TIEPh 第 3 ユニット 環境デザインユニット—

身体と行為の環境を考えてみる。環境というとき、通常は周囲の環境世界をイメージしてそのなかに自分や人間一般を置き直して、環境世界内に自分はあるというように想定している。ここには実は視覚的なトリックが含まれている。イメージされている環境は、視覚的に捉えているある意味での全体像である。それは自分の外に見えている世界であり、それにいくぶんか変容をかけた世界である。その世界のなかに、自分の身体を移し込んでいるのである。身体にとっての環境や身体とともにあるものにとっての環境は、およそそうしたものではないのではないかと感じられる。人間のように過度に視覚優先の知識になってしまえば、環境のなかでも大幅に見落としてしまうものがでることは避けようがない。

そうした身体にとっての環境を掴むためには、視覚を括弧に入れ、感じ取ることのできる環境を捉えるようにしてやる必要がある。ある場所に出向いてみる。そこで感じ取ったものを、感じ取ったままに描く必要が生じる。魚は周囲の水を感じ取っているはずである。それは見て知ることとは異なった感じ取り方をしているに違いない。また植物は周囲の水や空気を感じ取っているはずだが、その場合にも周囲に環境全般を思い描いているはずがないのである。

そうした環境の感じ取りを経験の前景に出現させるためには、いささか訓練も必要である。そのためにも環境への感度を拡張していかなければならない。いくつかの訓練の仕方があるが、最初のとっつきは、知らない場所に行き、しばらく佇み、五感を目一杯開いて、感じられるものをことごとく記述していくことである。それは経験を相当に組み替えていくことでもある。そこに哲学の課題もあり、哲学からの環境論への通路もある。

「エコ・フィロソフィ」研究 Vol.9
Eco-Philosophy Vol.9

平成 27 年 3 月 24 日発行

編集：東洋大学「エコ・フィロソフィ」
学際研究イニシアティブ(TIEPh)事務局
〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Tel : 03-3945-7534

E-mail : ml.tieph-office@toyo.jp

Homepage : <http://tieph.toyo.ac.jp/>